

うるおい

第16号
2023年1月

患者さまの作品



新年のご挨拶

新年を迎え、皆様方はいかがお過ごしでしょうか。2020年1月に国内で初めて報告された新型コロナウイルス感染症は、変異株の出現により感染拡大を繰り返し、収束することなく4年目の春を迎えました。ワクチン接種も回数を重ね、感染者数に比して重症者・死亡者数は減少しましたが、連日多数の感染者が報告されています。今後もウイズコロナの時代を歩んでいかなければなりません、社会生活の制限は緩和され、コロナ前の生活を取り戻しつつあります。

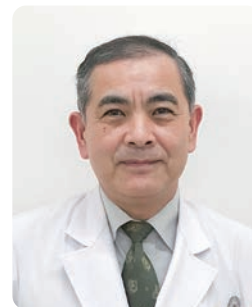
しかし、重症化しやすい高齢者や病弱者をお世話する医療・介護の分野では、感染拡大を極力避けなければならない、安全な療養環境を提供するため、今後も緊張感を維持しながら日々の業務に当たりたいと思います。

また、昨年2月に始まったロシアのウクライナへの軍事侵攻による社会不安やエネルギー危機、その後の記録的円安による燃料費高騰と物価高が毎日の生活を直撃しています。新年になっても好転の見込みはなく、今後の不安が募るばかりです。

このような社会状況ではありますが、2024年秋の当院開設50周年に向けて、コロナ禍で中断していた病院施設の改修工事を昨年秋から再開しました。2016年春に始まった一連の改修工事もこれが最後となります。病院機能を維持しながらの長期間の工事となり、病院を利用される皆様方にご不便をおかけしますことをお詫び申し上げます。

今年は卯年です。野を駆け回るうさぎの如く、当院にとりましても、皆様方にとりましても、今年が飛躍の年となりますことを切に願いたいと思います。

本年もより良い医療を提供すべく努力して参りますので、これまで同様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。



脳神経センター阿賀野病院
院長 近藤 浩



ALS患者の人工呼吸器装着の判断は、とても難しいです

脳神経内科部長 横関 明男

筋萎縮性側索硬化症(ALS)は、病名の通り全身の筋肉が萎縮(=やせる)する病気です。原因は、筋肉ではなく筋肉を支配する運動神経の減少により起こります。障害される神経により、腕の筋肉の萎縮、筋力低下で発症する方、足から発症する方など、症状の出方は人それぞれです。この病気の大きな問題点の一つは、病気の進行とともに呼吸に必要な筋肉も萎縮するため、呼吸が出来なくなる事です。病気の進行は人により様々ですが、概ね発症から2~5年で呼吸不全となり、人工呼吸器を装着しなければ呼吸停止に至ります。ALS患者では、呼吸不全になった時に人工呼吸器を装着するか否かという大きな選択に迫られます。本項では、私が経験したALS患者をご紹介します。ALS患者の人工呼吸器装着の難しさを感じていただければと思います。

患者さんは60歳代後半の男性、Aさんです。私が以前勤務していた病院に通院されており、私が赴任する前にAさんはすでにALSと診断されました。外来主治医とAさん、ご家族との間で、病気の進行期の対応を相談されており、呼吸不全が進行してきた時には、人工呼吸器は装着しないという方針でした。Aさんが通院している病院に私が赴任して早々に、呼吸状態が悪化したということで、救急車で緊急搬送されてきました(この時主治医が不在で、私に対応しました)。救急室で、人工呼吸器の装着の意志について最終確認をすると、奥様が「人工呼吸器を装着してほしい!」と訴えました。一方、Aさんご自身は、人工呼吸器の装着については首を横にふり、「NO!」の意志表示でした。事前の話と異なっており、私は大変困ってしまいました。ゆっくり考えている余裕もなく、ここで人工呼吸器を装着しなければ命がなくなってしまうため、最終的に人工呼吸器を装着することにしました。

私が本当に困ったのは、実はこの後からでした。人工呼吸器を装着する前は、呼吸状態が悪化しており意識レベルも落ちていたのですが、人工呼吸器を装着し呼吸状態が改善すると、意識レベルも改善しました。意識は完全に清明になったものの、患者さんは私に眼を合わせてくれなくなりました。無表情となり、完全に心を閉ざしてしまいました。A

さんにとって、私が人工呼吸器を装着したことは、裏切り行為と捉えたのだと思います。私は、Aさんの希望とは異なる行為をしてしまったわけですので、Aさんの反応は当然だと思いました。Aさんは、医師、家族など信じられる人を完全に失ってしまった訳です。これ以降、私は毎回重い足取りで、Aさんの病室に向かいました。天気、スポーツ、芸能など、いろいろ話題を振って、閉ざした心を開いてくれないかな?と試みましたが、全く開く気配はありませんでした。完全に八方塞がりの状況で、Aさんのご家族と今後の方針について相談したところ、在宅で介護をしたいとご家族よりお話をいただきました。そこで、そのことをAさんに伝えると、人工呼吸器装着後初めてAさんが「えっ!!」という、とてもびっくりした表情をされました。その後分かったことですが、Aさんが人工呼吸器の装着を望まなかったのは、人工呼吸器を装着すると自宅に帰ることができないと思っていたからでした。Aさんが在宅へ戻ることが決まってからは、病院スタッフ、訪問看護ステーション、ご家族が一丸となりました。訪問看護などの手配、緊急時の連絡体制の構築、家族に吸引手技を身につけていただき、無事自宅退院する日を迎えました。退院する日は、病院の救急車に私も同乗し、自宅に伺いました。自宅に帰ったAさんは、とてもうれしそうでした。この病院では、訪問診療も実施していたため、私が訪問診療を行うことになりました。訪問のたびに、在宅での出来事を私に伝えるのがAさんは楽しみにしているようであり、時間の許す限りお話を伺いました。最終的には、私の次の医師にバトンタッチしたため、Aさんが最終的にどのようなようになったのかは分かりませんが、年齢から考えておそらく天国に旅立ったものと思います。

今回人工呼吸器を装着しなかったら、私は大きな過ちを犯すところでした。病気の治療の選択の際、ご本人の意志が最優先されるべきです。その決定の際には、患者さんやご家族が方針を決定するために、すべての事実を知る必要があり、その上で患者さん、ご家族が後悔のない選択をしていただきたいです。

2024年夏
完成予定

外来エリアと管理棟が新しくなります！

2024年11月に開院50周年を迎えます。そのため、施設の老朽化が課題になっており、2016年の病棟建て直しから順次改修工事を進めてまいりました。この度、一つの区切りとしまして、外来エリアと管理棟(医局や会議室、職員食堂など)に着手する運びとなりました。進行状況により工事区域も変更となりますので、ご不便をおかけしますがご理解とご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

また、これに伴い、2022年9月14日に、「地鎮祭」を執り行いました。旦那野神社の神主を招き、関係者一同、工事の安全を祈願しました。



完成イメージ



管理棟外観



外来待合ホール



工事の案内【お願い】

改修工事に伴い、駐車場の一部が使用できなくなっております。また、大型車両の往来もありますので、十分ご注意ください。

ご不明な点がございましたら、受付・事務までお問い合わせください。



師長交代のお知らせ

第2病棟の師長が交代となりましたので、紹介いたします。

杵淵 恵美子



この度、12月15日をもって脳神経センター阿賀野病院を退職いたしました。

看護学校卒業後に入職し43年という長い間、皆様の温かいご支援とご協力のもと無事に退職の日を迎えることができました。心より感謝とお礼を申し上げます。

平成10年に介護老人保健施設阿賀の庄への出向を命じられました。師長としての責任の重さを実感し、試行錯誤しながらも利用者様の笑顔に何度も救われたことを思い出します。阿賀の庄で過ごした時間は私にとって大切な財産となりました。その後、平成19年から療養病棟の師長に就任し、今日に至ります。難病患者様やご家族に接しながら、真摯に向き合うことの大切さを改めて教えて頂きました。難病看護は看護の原点であると確信しております。

私の看護師人生において「これでよし!」はありませんでした。常に「看護」を模索しながら走り続けてきた様に思います。微力な私ではありましたが、一緒に歩んでくださった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

伊藤 亜希子



杵淵師長の後任として第2病棟の師長を務めさせて頂くことになりました。

私は、当院に入職し18年目となります。これまで、神経難病を患っている多くの患者様と関わり、学ばせて頂きました。その経験から、私たち看護師の日々の観察や援助の積み重ね、つまり看護の力が患者様の状態や生活の質に直結すると実感しています。第2病棟では、意思の疎通が困難な方、多くの介助を必要とされる方もいらっしゃいます。患者様に安心して穏やかな入院生活を送って頂くためには、看護師が傾聴し共感する心をもって接することが大切だと思います。確かな技術、知識をもとに心が通う看護を提供できるよう努めてまいります。また、スタッフ一人ひとりの個性を大切に、チームワークの向上を目指していきます。まだまだ至らぬ点ばかりで、皆様にご迷惑をお掛けしていますが、今後ご指導よろしくお願い致します。

外来のご案内 脳神経内科・内科・リハビリテーション科

受付時間 午前8時45分~11時30分(休診日 土・日・祝)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
第1診察室	近藤 浩	横関 明男	青木 賢樹	近藤 浩	佐藤 達哉
第2診察室	豊島 靖子	佐藤 達哉	(近藤 浩)	豊島 靖子	青木 賢樹
リハビリテーション外来					工藤 由理

※()の医師については、急患対応のみとなります。 ※都合により担当医が変更になることがありますので、詳細は受付までおたずねください。 ※なお、新患で受診ご希望の方はあらかじめお電話にてご予約をお願いいたします。受診時間などを相談させていただきます。

院内行事レポート

【院内研修】

リハビリテーション科より、トランスファーボードの使用法について学びました。

「トランスファーボード」とは、ベッドと車いすの間の隙間を埋めて、座ったままの状態でも移動できるように動作をサポートする福祉用具です。これを使うことで、立ち上がり困難な方でも楽に移動でき、介助する側の腰痛防止にもなります。これからはリスク軽減、安全第一で介助できるように努めていきます。



医療法人潤生会 脳神経センター阿賀野病院 広報誌

うるおい

第16号

2023年1月

■発行日 2023年1月4日

■発行人 院長 近藤 浩 ■編集 広報誌事務局

〒959-2221 新潟県阿賀野市保田6317番地15

脳神経センター阿賀野病院

電話 0250-68-3500 FAX 0250-68-3690

URL <http://www.agano.or.jp> メール info@agano.or.jp

広報誌「うるおい」へのご意見・ご感想は
広報誌事務局までお寄せください。

広報誌事務局

編集後記

新年あけましておめでとございます。皆さんはうさぎ年といえはどんなイメージが浮かびますか? 一般に、うさぎの温厚な性格から「家内安全」、跳ねる様子から「景気回復」などのイメージがあるようです。昨今のコロナ禍や不景気などの閉塞感から抜け出し、誰もが安心して生活できる年になることを願います。

さて今回は難病解説の番外編として、当院医師の経験談を掲載しました。医療機関を利用する全ての人が考えさせられる内容となりますので、是非一読ください。

また今年より、すべての病棟が新師長の体制となりました。長年顔を合わせていた師長がいなくなり寂しさを覚える方もおられるかと思いますが、新しい体制で新年を迎えることとなりますが、以前と変わらぬ信頼を頂きますよう、よろしくお願ひ申し上げます。